

# 西安寺跡第9次発掘調査 現地説明会資料

2019.12.8. 奈良県王寺町地域交流課



写真1 西安寺跡のある舟戸神社周辺（北から）



写真2 東回廊跡の検出状況（東から）

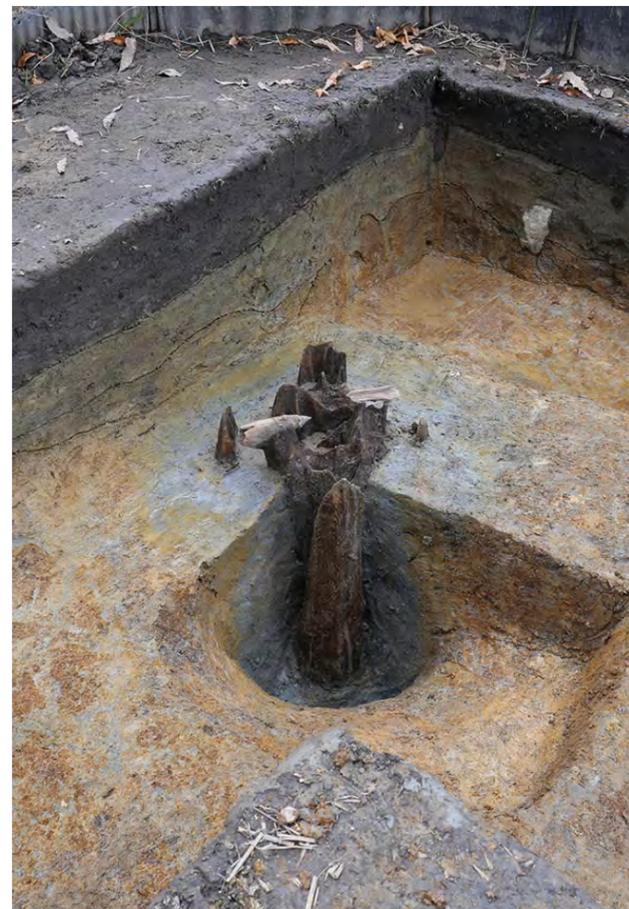


写真3 伽藍中軸線上で検出した柱根（北西から）

## 1 はじめに

西安寺跡は王寺町舟戸2丁目の舟戸神社周辺にあります。大和川から南へ約200mのところに位置し、法隆寺、中宮寺跡、法起寺、法輪寺、平隆寺、長林寺、片岡王寺跡、尼寺廃寺跡と同じく大和川沿岸の斑鳩・片岡地域に数多く所在する飛鳥時代寺院のひとつです。王寺町では西安寺跡の保存・活用を目指して、平成26年度から発掘調査を継続しています。

## 2 調査の経過

西安寺跡ではこれまで8次にわたる調査を行い、次のようなことがわかっています。

- ・ 拝殿の北東に塔が位置し、乱石積の外装をもつ13.35m四方の基壇に、3間等間で6.75m四方の建物が建ち、7世紀末から8世紀初頭頃に建立されたこと
- ・ 塔の北側に金堂が位置し、乱石積の外装をもつ東西14.9m、南北12.2mの基壇に、東西（桁行）5間、南北（梁行）4間の建物が建っていたこと
- ・ 西安寺は南向きの四天王寺式伽藍配置であったこと

以上の成果から、平成31年2月22日には舟戸神社境内が西安寺跡として奈良県史跡に指定されました。

今回の第9次調査は、塔・金堂に続いて講堂や回廊などの有無を確認するとともに、伽藍中軸線を確定させることなどを目的に、令和元年11月6日から実施しています。

## 3 調査の成果

3トレンチ 金堂基壇の南端付近を発掘したところ、自然石の花崗岩などを積み上げて化粧する乱石積の基壇外装を検出しました。その前面には幅約65cm、高さ10～20cmで整地された犬走りが見えています。基壇の南端が確認できたことで、伽藍中軸線は座標北から15.7°東偏することがわかり、金堂基壇の東西長は、東端から伽藍中軸線で折り返せば14.1mとなります（第8次調査での14.9mから修正）。南側の雨落部分からは多量の瓦が出土し、それらのなかでは平安前期の軒平瓦が最も新しいので、金堂の屋根瓦がその頃に修理されて以降、鎌倉時代までに建物は失われたと考えられます。

2トレンチ 塔跡・金堂跡の東側を発掘したところ、金堂基壇の東端から東へ約5mのところ東回廊を検出しました。回廊は上端幅4.6m、下端幅5.8m、高さ24cmで、内側・外側に雨落溝があります。東回廊から伽藍中軸線で折り返して西回廊の位置を推定してみると、西回廊外側の雨落溝がちょうど神社境内西端のコンクリート水路に相当し、現地形にもなお西安寺の区画が残っていることがわかります。このことから、回廊を含む伽藍の東西長は、37.6mであったと推定されます。

1トレンチ 金堂跡の北側を発掘したところ、南から北にかけて地山が徐々に下がり、そこに版築のように土を何層にも重ねて広く整地されている状況が確認できました。調査区の北端では整地層の厚さが1.35m以上もあり、整地層の下方から飛鳥時代後半の須恵器（飛鳥Ⅱ杯H）が出土しました。つまり、金堂より北の一带はその頃に整地して伽藍地を確保したと考えられます。また、金堂基壇の北端から北へ約7mの地点からは、4本の添柱で支えられた直径約30cmの柱根が検出できました。柱根は伽藍中軸線上に位置し、祭祀の際に掲げる幡（はた）の竿（幢竿・どうかん）ではないかとも見ることができます。北回廊や講堂は確認できませんでしたが、整地の状況から伽藍の南北長は75m以上におよぶ可能性があります。

## 4 まとめ

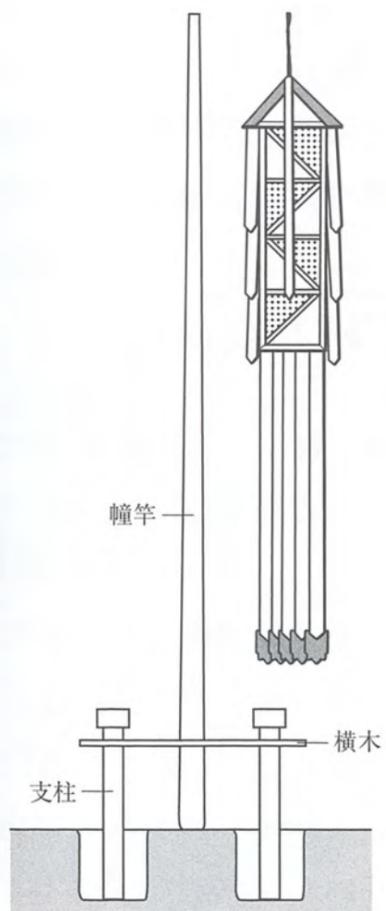
これまでの調査によって、塔・金堂・回廊が明らかになり、西安寺の伽藍は7世紀後半頃に整えられるようになったことがわかってきました。

令和元年9月に奈良文化財研究所の協力を得て、第8次調査で出土した素弁蓮華文軒丸瓦と法隆寺若草伽藍で出土した素弁蓮華文軒丸瓦（型式番号6B・7Ab）を比較調査したところ、同じ木型で作られた同形の瓦であることがわかり、西安寺と法隆寺は近い関係にあることもうかがえるようになりました。

西安寺は、難波と大和を結ぶ交通路でもある大和川沿岸に建立された飛鳥時代寺院を解明するうえで貴重な遺跡であり、今後も調査を継続し、保存・整備を図っていきたく考えています。



図1 大和川周辺の寺院遺跡 (1/50,000)  
(下図) 国土地理院発行



(参考) 幡 幡

(注) 文化庁『発掘調査のてびき—各種遺跡調査編—』

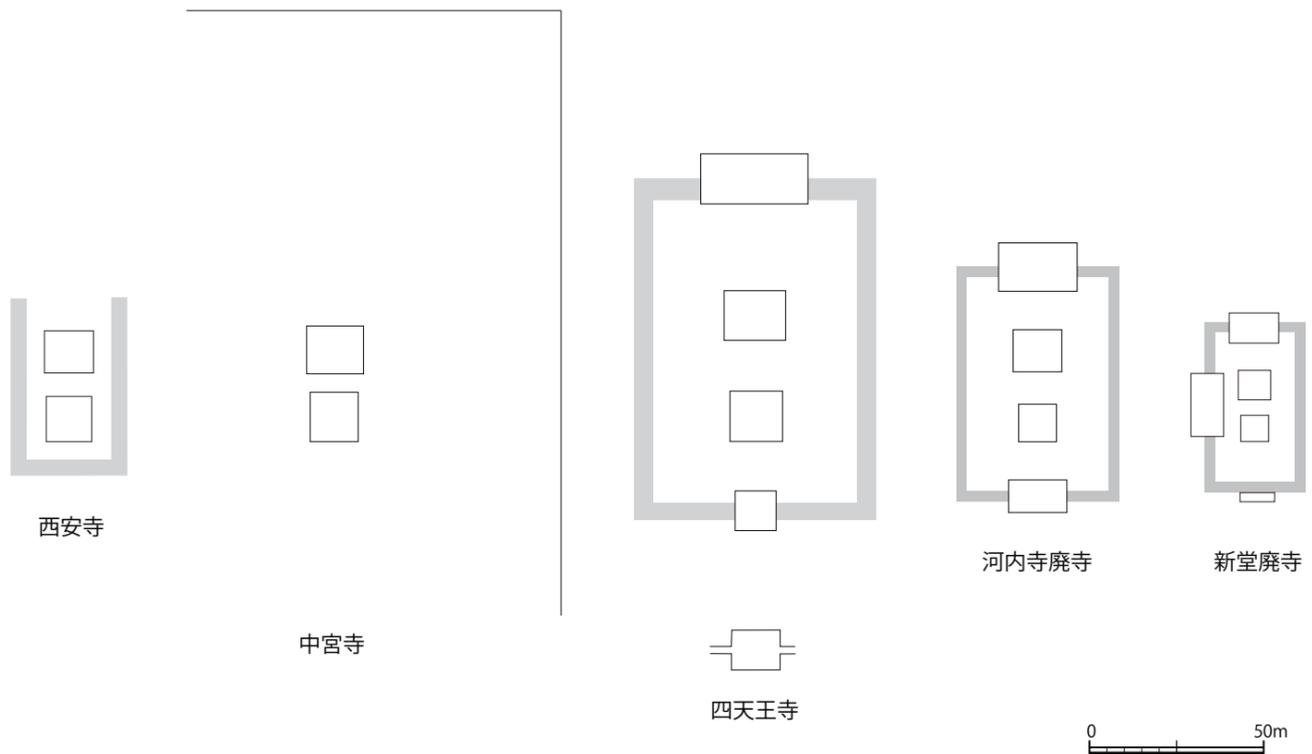


図3 四天王寺式伽藍配置の規模の比較 (1/2000)

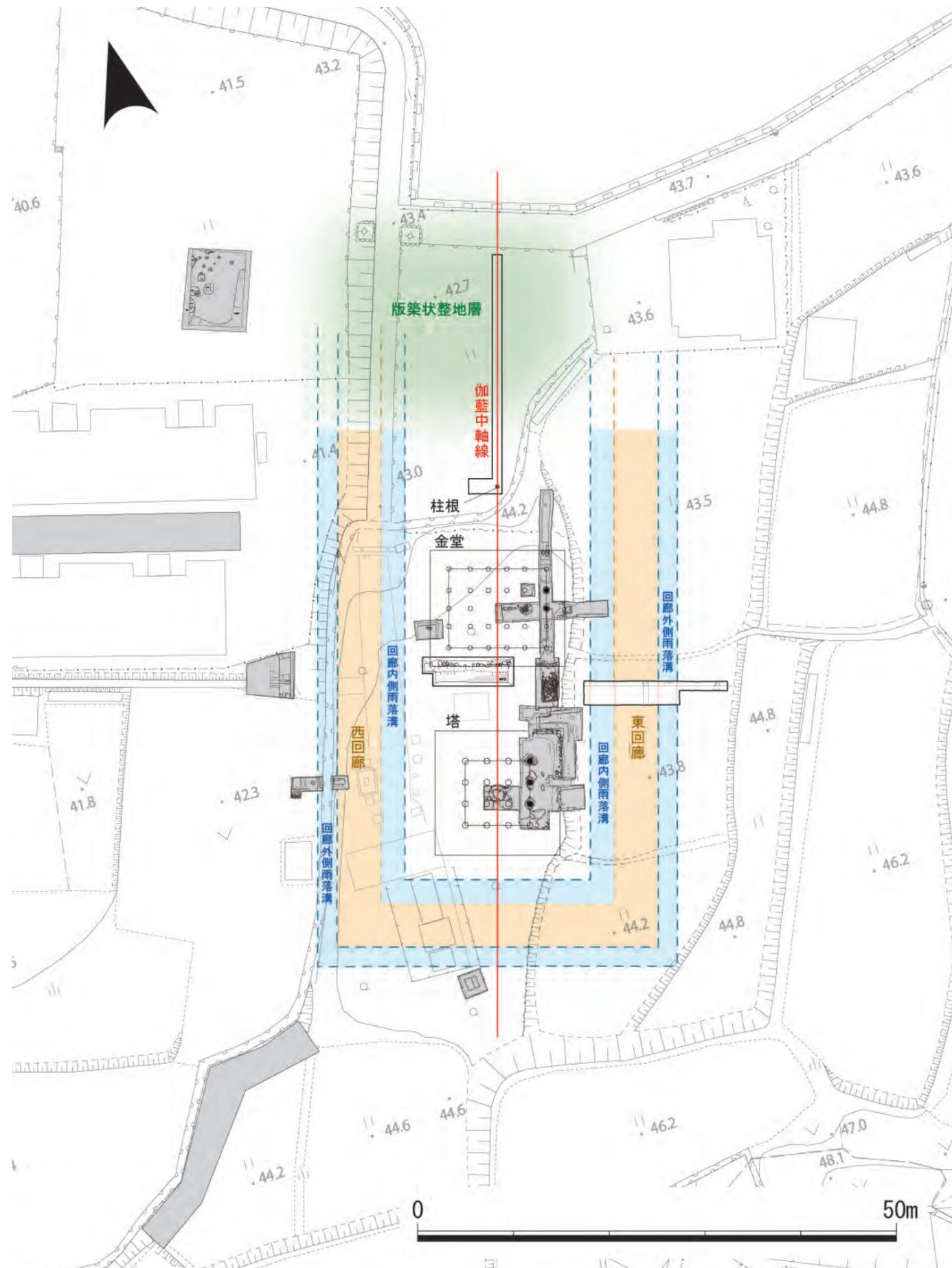


図2 西安寺の伽藍推定図 (1/500)